

JGSS-2000 のデータにみる
同居世帯人数がペットの存在感に及ぼす影響
同居している子どもの有無の観点から

杉 田 陽 出
(大阪商業大学経済学部)

The Influence of the Number of Household Members on the Perception of Pets
Observed in the Data of JGSS-2000
From the Perspective of Children Present at Home
Hizuru SUGITA

Analyzing the data of JGSS-2000, this study was designed to explore how the number of household members, the presence of children at home, and the age of the youngest child present at home influence pet owners' perception of their pets. The results of this study revealed the followings: as the number of household members increases, the rate of pet ownership becomes higher, but the meaning of pets becomes less important. On the contrary, as the number of household members decreases, the rate of pet ownership becomes lower, but the meaning of pets becomes more important. Depending on the number of household members, the presence of children at home influences the perception of pets. The results also proved that, in order to examine the effects of the presence of children at home on the perception of pets, the age of the youngest child present at home is a crucial factor to consider.

Key words: JGSS-2000, pets, the number of household members

本研究は、JGSS-2000 のデータを分析し、ペット飼育者の同居世帯人数、同居している子どもの有無、そして同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響を調査したものである。分析の結果、次のことが明らかになった。同居世帯人数が多くなるにしたがって、ペットの飼育率は高くなるが、ペットの存在感に対する評価は低くなる。反対に、同居世帯人数が少なくなるにしたがって、ペットの飼育率は低くなるが、ペットの存在感に対する評価は高くなる。同居世帯人数によっては、同居している子どもの有無がペットの存在感に影響する。また、同居している子どもの有無がペットの存在感に及ぼす影響を検証するうえで、同居している最年少の子どもの年齢が、考慮すべき重要な要因であることも証明された。

キーワード：JGSS-2000、ペット、同居世帯人数

1. はじめに

欧米では 1970 年代に入り、人と動物の関係を見直す目的で、「人と動物の絆 (Human-Animal Bond)」の概念が提唱されたのをきっかけに、獣医学、精神医学、臨床心理学、動物行動学などの様々な分野で、人と動物の相互作用関係を科学的に分析し、解明しようという研究が行われている。その研究は、医療の現場で動物が人にもたらす生理的効果や心理的効果を解明することから、家庭においてペットが子どもの成長過程に及ぼす影響を検証するに至るまで、幅広いテーマで行われている (Robinson, 1995)。日本においても、第 2 次世界大戦後の高度経済成長期以降、各家庭に経済的余裕ができたことに加えて、欧米文化の導入や、「人と動物の絆」に基づいた動物に対する意識が紹介され始めたことにより、ペットに対する意識が大きく変化している。1960 年代の高度経済成長期以前は、単に家庭で飼育されている動物、あるいは使役目的で飼育されている動物といった社会的認識が主流を占めていたのに対して、今や「コンパニオン・アニマル (伴侶動物)」と呼ばれるペットは、「人と生活を共にするパートナー」として、その社会的地位を確立しつつある。このような日本におけるペットに対する認識の変化を踏まえて、日本人のペット飼育の現状やペットに対する意識に関して、これまでにいくつかの調査が実施されている。しかし、その数は限られており、日本人とペットの関係について十分に解明するには至っていない。本調査は、現代における日本人とペットの関係を解明する手がかりの一つとして、家庭における「子ども」としてのペットの存在性に着目し、大阪商業大学比較地域研究所と東京大学社会科学研究所の共同プロジェクトである日本版 General Social Surveys (JGSS) の第 1 回本調査である JGSS-2000 のデータを用いて、ペット飼育者の同居世帯人数と同居世帯構成がペットの存在感に及ぼす影響を調査することを目的としている。

2. 家庭におけるペットの存在

日本では、「ペットは家族の一員である」ということが、最近よく言われている。ペット飼育用の設備が整ったマンションや一戸建て住宅が登場し、ペットと泊まれるホテルに人気が集まっている現在、日本人にとって、ペットは毎日の行動を共にする家族の一員となっているのであろう。味の素ゼネラルフーズ株式会社 (1996) が、ペットを飼う日本人 500 人を対象に行ったアンケート調査によると、「あなたとペットの仲 (間柄) は？」という設問項目に対して、ペットは「子ども」と答えた人が 39% と最も多く、続いて「友人」(19%)、「兄弟姉妹」(17%)、「家族」(8%)、「恋人」(4%)、「孫」(2%)、「その他」(8%) という結果が得られた。この調査結果は、ペットが「兄弟姉妹」や「孫」といった家族の一員にたとえられる存在であり、中でも「子ども」と認識される傾向が強いことを示している。欧米においても、ペットは家族の一員であり、「子ども」と認識されることが指摘されている。例えば、Albert & Bulcroft (1988) が合衆国のロードアイランドとミネソタに居住する 612 人のペット飼育者を対象に実施した調査では、87% の人がペットを家族の一

員とみなしていることが明らかになった。また、同調査において、飼育者の婚姻の有無、子どもの数、同居している子どもの数、好きなペットの種類、そしてライフステージがペットへの愛着度に及ぼす影響を調べた結果、ペットへの愛着度が最も高い飼育者の条件として、子どもがいない夫婦、同居している子どもがいない夫婦、そして子どもが成人して家を出ている夫婦があげられた。さらに、子どもがいない夫婦がペットを擬人化する傾向が強いことも判明した。この調査結果は、合衆国の家庭において、ペットが家族であり、同時に「子ども」の役割を担っていることを示唆している。Beck & Katcher (1996) は、ペットは家族の一員であるだけでなく、「子ども」と認識されることを強調したうえで、その理由を、親の愛情や世話を必要とする幼児に似たペットの行動形態にあると説明している。本調査では、ペット飼育者の同居世帯人数、同居している子どもの有無、そして同居している最年少の子どもの年齢という観点から、日本の家庭における「子ども」としてのペットの存在性に関して、検証を試みている。

3. 方法

日本版 General Social Surveys (JGSS) の第1回本調査である JGSS-2000 は、平成 12 (2000) 年 10 月下旬から 11 月にかけて、13 大都市を含む計 18 の市町村郡 300 地点において、無作為に抽出された 20 歳から 89 歳までの男女 4500 人を対象に実施された。そして、回収された 2893 ケースの内、現在ペットを飼っていると回答した 1105 人(全体の 38.2%) に、現在飼育しているペットの種類(複数回答)、ペットの存在感に関する 8 つの項目、1 日にペットと過ごす時間について尋ねた。本調査では、ペットの存在感に関する設問項目で得られたデータを用いて、ペット飼育者 1105 人を対象に、同居世帯人数、同居している子どもの有無、そして同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響について分析した。

ペットの存在感に関する設問(Q61の付問(2))は以下の通りである。

Q	ペットは、あなたにとってどのような存在ですか。
	強くそう思う そう思う 少しはそう思う そうは思わない
	1 2 3 4
A	気持ちをなごませしてくれる
B	生活にはりあいを与えてくれる
C	孤独感や寂しさを癒してくれる
D	世話をすることで規則正しい生活ができる
E	ペットは自分を必要としてくれる
F	家族とのコミュニケーションに役立つ
G	生きがいである
H	ペットを通じて人間関係が広がる

この設問では、ペットの存在感を問う8つの項目に関して、「強くそう思う」、「そう思う」、「少しはそう思う」、「そうは思わない」の4つのカテゴリーから1つを選択する形式になっている。本調査では、それぞれの項目について、「強くそう思う」を4、「そう思う」を3、「少しはそう思う」を2、「そうは思わない」を1という数値に置き換えて、ペットの存在感に対する評価点としている。また、本調査における有意水準値は、5%に設定している。

4. 結果と考察

4.1 同居世帯人数とペットの存在感

まず、JGSS-2000のデータを基に、同居世帯人数別にペットの飼育率を算出した。表1に示されているように、ペットの飼育率は、男女共に同居世帯人数が増えるにしたがって高くなる。ペット飼育者全体では、1人暮らし世帯の飼育率が13.1%と最も低く、同居世帯人数が2人では29.1%、3人では38.7%、4人では44.7%、5人では49.0%となる。そして、同居世帯人数が6人以上では飼育率が49.8%と、約半数の家庭でペットを飼育していることがわかる。ペットの飼育率が1人暮らしの世帯で最も低いのは、ペットの世話にかかる手間や時間、経済状態、住宅環境などの面で、ペットを飼うことを躊躇する要因が多いためと推測される。総理府(2000)の調査によると、「家族が動物好きだから」という理由が、ペットを飼っている理由の第1位を占めており、この結果からも、ペットは世帯人数が複数の家庭で飼育される傾向があることがわかる。

表1 同居世帯人数別にみたペットの飼育率

同居世帯人数	男性		女性		合計	
	N	%	N	%	N	%
1人	11	11.8	18	14.0	29	13.1
2人	97	28.4	110	29.8	207	29.1
3人	136	43.3	115	34.4	251	38.7
4人	122	44.4	154	45.0	276	44.7
5人	63	46.3	114	50.7	177	49.0
6人以上	79	50.3	86	49.4	165	49.8
合計	508	38.6	597	38.0	1105	38.2

次に、同居世帯人数がペットの存在感に及ぼす影響を調べるために、同居世帯人数を独立変数、ペットの存在感に関する8つの項目を従属変数として分散分析を行った。表2はその分析結果を示している。ペット飼育者全体では、「家族とのコミュニケーションに役立つ」と「ペットを通じて人間関係が広がる」の2項目を除いた6項目において、ペットの

存在感に対する評価に同居世帯人数による差がみられる。男女別にみた場合、男性では、「生活にはりあいを与えてくれる」という項目においてのみ、同居世帯人数による差がみられ、他の7項目においては、同居世帯人数による差はみられない。それに対して、女性では、8項目全てにおいて、同居世帯人数による差がみられる。この分析結果から、2つのことが言えるであろう。まず、男性に関しては、同居世帯人数によってペットの存在感が変わることはほとんどないが、女性に関しては、ペットの存在感を評価するにあたって、同居世帯人数が大きく影響してくる。次に、ペット飼育者全体を対象とした分析結果には、女性のペット飼育者の分析結果が大きく影響している。したがって、本調査では、ペット飼育者全体から男性のペット飼育者を除いた女性のペット飼育者を対象として、これ以降の分析を行うこととした。

表2 同居世帯人数がペットの存在感に及ぼす影響に関する分散分析の結果

	男性		女性		合計	
	自由度	F 値	自由度	F 値	自由度	F 値
気持ちをなごませてくれる	5	0.5	5	3.4**	5	2.9*
生活にはりあいを与えてくれる	5	2.6*	5	4.9***	5	6.2***
孤独感や寂しさを癒してくれる	5	1.1	5	3.9**	5	4.2*
世話をすることで規則正しい生活ができる	5	0.6	5	7.0***	5	4.4*
ペットは自分を必要としてくれる	5	1.8	5	7.6***	5	7.0***
家族とのコミュニケーションに役立つ	5	0.6	5	2.3*	5	0.8
生きがいである	5	1.2	5	10.6***	5	9.8***
ペットを通じて人間関係が広がる	5	0.3	5	2.3*	5	1.0

注：* p<.05、** p<.01、*** p<.001

女性のペット飼育者に関して、同居世帯人数による差が観察された8つの項目の平均値は、表3の通りである。全ての項目において、1人暮らし世帯がペットの存在感を最も高く評価しており、同居世帯人数が増えるにしたがって、その評価は低くなる。チューキーのHSD検定による多重比較の結果、以下のことがわかった。「気持ちをなごませてくれる」の項目においては、同居世帯人数が1人と6人以上(p<.05)、2人と6人以上(p<.05)で、ペットの存在感に対する評価に差がみられる。「生活にはりあいを与えてくれる」の項目においては、同居世帯人数が1人と5人(p<.05)、1人と6人以上(p<.01)、2人と5人(p<.05)、2人と6人以上(p<.01)で差がみられる。「孤独感や寂しさを癒してくれる」の項目では、同居世帯人数が1人と4人(p<.01)、1人と5人(p<.05)、1人と6人以上(p<.01)で差がみられる。「世話をすることで規則正しい生活ができる」の項目においては、同居世帯人数が1人と5人(p<.05)

2人と4人 ($p<.001$)、2人と5人 ($p<.001$)、2人と6人以上 ($p<.01$) で差がみられる。「ペットは自分を必要としてくれる」の項目では、同居世帯人数が1人と5人 ($p<.05$)、1人と6人以上 ($p<.01$)、2人と3人 ($p<.05$)、2人と4人 ($p<.05$)、2人と5人 ($p<.001$)、2人と6人以上 ($p<.001$) で差がみられる。「家族とのコミュニケーションに役立つ」の項目では、同居世帯人数が2人と5人 ($p<.05$) で差がみられる。「生きがいである」の項目では、同居世帯人数が1人と3人 ($p<.001$)、1人と4人 ($p<.001$)、1人と5人 ($p<.001$)、1人と6人以上 ($p<.001$)、2人と3人 ($p<.01$)、2人と4人 ($p<.001$)、2人と5人 ($p<.001$)、2人と6人以上 ($p<.001$) で差がみられる。そして、「ペットを通じて人間関係が広がる」の項目においては、有意水準値が5%における差はみられない。

表3 同居世帯人数別にみたペットの存在感に関する8項目の平均値

同居世帯人数		1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	合計
気持ちをなごませてくれる	平均値	3.6	3.3	3.2	3.2	3.1	2.9	3.1
	N	18	110	112	153	111	84	588
生活にはりあいを与えてくれる	平均値	3.2	2.8	2.7	2.6	2.4	2.3	2.6
	N	17	108	111	153	110	83	582
孤独感や寂しさを癒してくれる	平均値	3.5	2.9	2.9	2.6	2.7	2.6	2.8
	N	17	106	111	152	108	83	577
世話をすることで規則正しい生活ができる	平均値	2.9	2.8	2.5	2.3	2.2	2.3	2.4
	N	17	108	112	151	109	84	581
ペットは自分を必要としてくれる	平均値	3.4	3.2	2.8	2.8	2.6	2.5	2.8
	N	17	107	112	151	108	84	579
家族とのコミュニケーションに役立つ	平均値	3.1	3.1	2.9	2.9	2.7	2.8	2.9
	N	16	108	113	151	109	83	580
生きがいである	平均値	3.3	2.7	2.2	2.1	2.0	2.0	2.2
	N	17	107	110	150	107	83	574
ペットを通じて人間関係が広がる	平均値	2.7	2.7	2.4	2.4	2.4	2.3	2.4
	N	18	106	112	151	108	81	576

多重比較の結果によると、ほとんどの項目において、同居世帯人数が1人と2人では差がみられない。また、3人、4人、5人、そして6人以上の同居世帯人数間でも差はみられない。この結果は、同居世帯人数が2人以下か3人以上かで、ペットの存在感に差が生じること、そして1人暮らし及び2人暮らしの世帯では、同居人数が3

人以上の世帯よりも、ペットの存在感を高く評価していることを示唆している。特に、「生きがいである」、続いて「ペットは自分を必要としてくれる」、「世話をすることによって規則正しい生活ができる」の項目において、この傾向が顕著である。

同居世帯人数によるペットの飼育率は、1人暮らし世帯が最も低く、同居世帯人数が増えるにしたがって高くなる。一方、ペットの存在感に対する評価に関しては、1人暮らし世帯と2人暮らし世帯で高く、同居世帯人数が増えるにしたがって低くなる。ペットの飼育率と同居世帯人数がペットの存在感に及ぼす影響に関する以上の調査結果から、次のことが推察される。家族の人数が1人や2人の少人数世帯の場合、ペットの世話にかかる手間や時間、経済状態、住宅環境などの制約のために、ペットを飼う機会が少なくなる。しかし、そのような世帯がペットを飼うと、ペットは家庭における孤独感を埋め、毎日の生活のリズムや生きがいを生み出し、さらには飼育者自身の存在価値を肯定してくれるといった、本来は人間の家族が果たす役割を担う存在となる。一方、家族の人数が多くなると、ペットを飼う機会は増えるが、家族の代わりとしてのペットの存在性を認識することが少ないために、家族の人数が少ない世帯ほどには、ペットの存在感に対する評価も高くはならない。

このように、同居世帯人数がペットの存在感に及ぼす影響に関する分析結果は、「家族」としてのペットの存在性を裏付けるものとなった。では、「子ども」としてのペットの存在性についてはどうであろうか。次は、同居世帯人数別に、同居している子どもの有無によるペットの存在感の分析結果について報告する。

4.2 同居している子どもの有無とペットの存在感

表4 同居世帯人数別にみた同居している子どもの有無の割合

同居世帯人数	子ども有り		子ども無し		合計 N
	N	%	N	%	
1人	0	0.0	18	100.0	18
2人	15	13.6	95	86.4	110
3人	80	69.6	35	30.4	115
4人	126	81.8	28	18.2	154
5人	97	85.1	17	14.9	114
6人以上	77	89.5	9	10.5	86
合計	395	66.2	202	33.8	597

表4は、女性ペット飼育者の同居世帯人数別に、同居している子どもがいる割合を示している。ペットの存在感に関する8項目について、同居している子どもの有無によるペッ

トの存在感を比較するために、同居人数が2人以上の世帯を対象に、同居世帯人数別にT検定を行った。ただし、同居世帯人数が6人以上では、同居している子どもがいないケース数が9という少数であるため、この分析からは除外している。T検定の結果、同居世帯人数が3人の場合は、「世話をすることで規則正しい生活ができる」の項目において、そして同居世帯人数が4人の場合は、「孤独感や寂しさを癒してくれる」、「生きがいである」、「ペットを通じて人間関係が広がる」の3項目において、ペットの存在感に対する評価に同居している子どもの有無による差がみられた。まず、同居人数が3人の世帯では、「世話をすることで規則正しい生活ができる」の項目において、同居している子どもがいない世帯よりも、同居している子どもがいる世帯の方が、ペットの存在感を高く評価している[t(110, 112)=-2.6, p<.05]。次に、同居人数が4人の世帯では、「孤独感や寂しさを癒してくれる」[t(150, 152)=4.7, p<.001]、「生きがいである」[t(148, 150)=2.2, p<.05]、そして「ペットを通じて人間関係が広がる」[t(149, 151)=2.0, p<.05]の3つの項目全てにおいて、同居している子どもがいる世帯よりも、同居している子どもがいない世帯の方が、ペットの存在感を高く評価している。なお、表5は、同居世帯人数別にみた、同居している子どもの有無によるペットの存在感に関する8項目の平均値を示している。

この分析結果が示唆するところをまとめてみよう。2人暮らしと5人暮らしの世帯においては、同居している子どもの有無はペットの存在感に影響を及ぼさない。同居している子どもの有無に関係なく、2人暮らしの世帯ではペットの存在感を高く評価し、5人暮らしの世帯ではペットの存在感の評価が低くなる。すなわち、同居している子どもがいるかないかではなく、同居している家族の人数が、ペットの存在感を決定する際の重要な要因となる。一方、3人と4人暮らしの世帯では、同居している子どもの有無が、ペットの存在感に影響を及ぼす要因となる。そして、同居している子どもがいる3人暮らしの世帯では、ペットのおかげで規則正しい生活が送れると考え、同居している子どもがいない4人暮らしの世帯では、ペットに孤独感を癒され、ペットを生きがいに感じ、ペットのおかげで人間関係が広がると感じている。

しかし、問題は、この結果から、家庭においてペットは「子ども」と認識されている、という結論を導き出すことができるのかという点である。4人暮らしの世帯では、「孤独感や寂しさを癒してくれる」、「生きがいである」、「ペットを通じて人間関係が広がる」の3項目において、同居している子どもがいる世帯よりも、同居している子どもがいない世帯の方が、ペットの存在感を高く評価している。この結果からは、人間の子どもの代わりに、ペットが飼育者の心のよりどころになっていることが推察される。しかし、3人暮らしの世帯における結果、すなわち、同居している子どもがいない世帯よりも、同居している子どもがいる世帯の方が、ペットの世話をすることで規則正しい生活が送れると感じている、という結果からは、ペットが飼育者にとって、「子ども」の役割を果たしていると判断することは困難である。女性の家事負担という観点から推考すると、同居している子どもがい

表5 同居世帯人数別にみた子供の有無によるペットの存在感に関する8項目の平均値

		同居世帯人数		2人	3人	4人	5人	合計
気持ちをなごませてくれる	子ども	平均値	3.6	3.1	3.1	3.0	3.2	
	有り	N	15	77	125	94	311	
	子ども	平均値	3.3	3.2	3.4	3.4	3.3	
	無し	N	95	35	28	17	175	
生活にはりあいを与えてくれる	子ども	平均値	3.1	2.7	2.5	2.4	2.7	
	有り	N	15	76	125	93	309	
	子ども	平均値	2.8	2.5	2.9	2.6	2.7	
	無し	N	93	35	28	17	173	
孤独感や寂しさを癒してくれる	子ども	平均値	3.2	2.9	2.5	2.6	2.8	
	有り	N	14	76	124	91	305	
	子ども	平均値	2.9	2.7	3.3	3.1	3.0	
	無し	N	92	35	28	17	172	
世話をすることで規則正しい生活ができる	子ども	平均値	2.9	2.6	2.3	2.1	2.5	
	有り	N	14	77	123	92	306	
	子ども	平均値	2.8	2.1	2.2	2.4	2.4	
	無し	N	94	35	28	17	174	
ペットは自分を必要としてくれる	子ども	平均値	3.3	2.9	2.7	2.6	2.9	
	有り	N	15	77	123	91	306	
	子ども	平均値	3.2	2.6	3.0	2.5	2.8	
	無し	N	92	35	28	17	172	
家族とのコミュニケーションに役立つ	子ども	平均値	3.1	3.0	2.8	2.7	2.9	
	有り	N	14	78	123	92	307	
	子ども	平均値	3.1	2.6	3.2	2.9	2.9	
	無し	N	94	35	28	17	174	
生きがいである	子ども	平均値	2.8	2.2	2.0	1.9	2.2	
	有り	N	14	75	122	90	301	
	子ども	平均値	2.7	2.0	2.4	2.2	2.3	
	無し	N	93	35	28	17	173	
ペットを通じて人間関係が広がる	子ども	平均値	2.6	2.5	2.3	2.4	2.4	
	有り	N	14	77	123	91	305	
	子ども	平均値	2.7	2.2	2.7	2.4	2.5	
	無し	N	92	35	28	17	172	

る女性の場合、子どもの世話をするために、規則的な生活を毎日送ることを余儀なくされる。したがって、同居している子どもがいない家庭の方が、ペットという存在が規則正しい生活を送る動機付けになるのではないかと推測される。ただし、子どもが成長してあまり手がかからなくなった場合や、子どもに配偶者がいる場合、あるいは子どもが家事を担っている場合には、この推測はあてはまらない。この疑問を解明するためにも、同居している子どもの年齢を考慮する必要があると思われる。子どもが成人して家を出ている夫婦のペットに対する愛着度は高く、乳幼児や学齢期前の子供を持つ夫婦のペットに対する愛着度は低いという Albert & Bulcroft (1988) の調査結果は、子供の年齢がペットの存在感の評価に大きく影響する可能性があることを示唆している。したがって、本調査では、同居している子供の中で、最年少の子どもの年齢に着目し、同居している子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響について分析することとした。しかし、同居世帯人数と同居している最年少の子どもの年齢という2つの要因がペットの存在感に及ぼす影響を分析するためには、JGSS-2000における女性ペット飼育者のケース数が十分でないため、今回の調査では、同居している最年少の子どもの年齢とペットの存在感との関係を分析するにとどめている。

4.3 同居している最年少の子どもの年齢とペットの存在感

同居している子どもがいる女性ペット飼育者 395 人について、同居している最年少の子どもの年齢は、0 歳から 64 歳までと幅広い範囲に及んでいる。最年少の子どもの年齢を 0 歳から 6 歳（乳幼児）、7 歳から 12 歳（小学生）、13 歳から 18 歳（中学・高校生）、19 歳から 29 歳（大学生および社会人）、そして 30 歳以上に分類した。また、比較のために、同居している子どもがいない世帯（202 ケース）を加えたうえで、同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響を調べるために、同居している最年少の子どもの年齢を独立変数、ペットの存在感に関する 8 つの項目を従属変数として分散分析を行った。その結果、表 6 に示されているように、「家族とのコミュニケーションに役立つ」の項目を除く 7 つの項目において、ペットの存在感に対する評価に同居している最年少の子どもの年齢による差がみられる。また、表 7 は、同居している最年少の子どもの年齢別にみた、ペットの存在感に関する 8 つの項目の平均値を示している。

チューキーの HSD 検定による多重比較の結果、以下のことがわかった。「気持ちをなごませてくれる」の項目においては、子どもの年齢が 0 - 6 歳と 13 - 18 歳 ($p < .05$)、0 - 6 歳と 19 - 29 歳 ($p < .05$)、0 - 6 歳と子どもがいない世帯 ($p < .01$)、13 - 18 歳と 30 歳以上 ($p < .05$)、19 - 29 歳と 30 歳以上 ($p < .01$)、30 歳以上と子どもがいない世帯 ($p = .001$) で、ペットの存在感に対する評価に差がみられる。「生活にはりあいをあたえてくれる」の項目においては、子どもの年齢が 0 - 6 歳と 19 - 29 歳 ($p < .05$)、0 - 6 歳と子どもがいない世帯 ($p < .001$) で差がみられる。「孤独感や寂しさを癒してくれる」の項目では、子どもの年

表6 同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響に関する分散分析の結果

	自由度	F 値
気持ちをなごませてくれる	5	7.1***
生活にはりあいを与えてくれる	5	4.6***
孤独感や寂しさを癒してくれる	5	4.4**
世話をすることで規則正しい生活ができる	5	3.1**
ペットは自分を必要としてくれる	5	5.4***
家族とのコミュニケーションに役立つ	5	1.9
生きがいである	5	7.9***
ペットを通じて人間関係が広がる	5	2.7*

注：* p<.05、** p<.01、*** p<.001

表7 同居している最年少の子どもの年齢別にみたペットの存在感に関する8項目の平均値

子どもの年齢		0 - 6 歳	7 - 12 歳	13 - 18 歳	19 - 29 歳	30 歳 以上	子ども 無し	合計
気持ちをなごませてく れる	平均値	2.8	3.2	3.3	3.2	2.9	3.3	3.1
	N	53	58	51	114	110	202	588
生活にはりあいを与え てくれる	平均値	2.1	2.5	2.5	2.7	2.5	2.8	2.6
	N	53	58	51	113	108	199	582
孤独感や寂しさを癒し てくれる	平均値	2.5	2.6	2.8	2.8	2.6	3.0	2.8
	N	53	58	51	114	103	198	577
世話をすることで規則 正しい生活ができる	平均値	2.2	2.1	2.3	2.5	2.4	2.6	2.4
	N	53	58	51	114	105	200	581
ペットは自分を必要と してくれる	平均値	2.4	2.7	2.9	2.9	2.5	3.0	2.8
	N	53	58	51	115	104	198	579
家族とのコミュニケー ションに役立つ	平均値	2.7	2.8	3.0	2.9	2.7	3.0	2.9
	N	53	58	51	115	104	199	580
生きがいである	平均値	1.7	1.9	2.1	2.2	2.1	2.5	2.2
	N	53	58	50	113	101	199	574
ペットを通じて人間関 係が広がる	平均値	2.1	2.2	2.4	2.5	2.3	2.6	2.4
	N	52	58	51	113	103	199	576

年齢が0 - 6歳と子どもがいない世帯 ($p < .05$)、30歳以上と子どもがいない世帯 ($p < .01$) で差がみられる。「世話をすることで規則正しい生活ができる」の項目においては、子どもの年齢が7 - 12歳と子どもがいない世帯 ($p < .05$) で差がみられる。「ペットは自分を必要としてくれる」の項目では、子どもの年齢が0 - 6歳と19 - 29歳 ($p < .05$)、0 - 6歳と子どもがいない世帯 ($p < .01$)、19 - 29歳と30歳以上 ($p < .05$)、30歳以上と子どもがいない世帯 ($p = .01$) で差がみられる。「生きがいである」の項目では、子どもの年齢が0 - 6歳と19 - 29歳 ($p < .001$)、0 - 6歳と子どもがいない世帯 ($p < .001$)、7 - 12歳と子どもがいない世帯 ($p < .001$)、30歳以上と子どもがいない世帯 ($p < .01$) で差がみられる。そして、「ペットを通じて人間関係が広がる」の項目においては、子どもの年齢が0 - 6歳と子どもがいない世帯 ($p < .05$) で差がみられる。

これらの分析結果は、同居している最年少の子ども年齢が、ペットの存在感に大きく影響することを示している。ほとんどの項目において、同居している子どもがいない世帯に比べて、0歳から6歳の乳幼児、7歳から12歳の小学生、そして30歳以上の子どもが同居している世帯におけるペットの存在感に対する評価は低い。一方、13歳から18歳の中学・高校生や19歳から29歳の大学生・社会人世代の子どもを持つ世帯においては、子どもがいない世帯と同じく、ペットの存在感を高く評価している。この傾向は、「気持ちをなごませてくれる」、「ペットは自分を必要としてくれる」、「生きがいである」の項目において特に顕著である。

また、0歳から6歳の乳幼児と7歳から12歳の小学生がいる世帯において、ペットの存在感に対する評価が低いのに対し、13歳から18歳の中学・高校生と19歳から29歳の大学生や社会人の子どもを持つ世帯において、ペットの存在感に対する評価が高いという結果は、ペットが「子ども」に代わる存在であることを示唆していると言えよう。0歳から6歳までの乳幼児期及び7歳から12歳までの学齢期の子どもを持つ母親は、育児に追われて忙しい毎日を送っているため、ペットの存在感を認識する時間的、精神的余裕は無い。彼女たちにとって、ペットよりも自分の子どもこそが、一番に気にかけて、守ってやらなければならない存在なのである。しかし、子どもが中学生や高校生になり、その世話にかかる時間や手間が減少し、ペットを省みる余裕ができた時に、ペットの存在感が大きくなっていく。人間の子どもとは異なり、成長してからも世話を必要とする、永遠の「子ども」であるペットの世話をすることで、母親である飼育者は、最もかわいい盛り期の「子ども」を育てる喜びを再び経験することができ、さらに、成長した子どもが自分から離れていく寂しさを癒すことができる。したがって、この年齢の子供を持つ世帯において、ペットの存在感が高く評価される結果となるのであろう。また、13歳から18歳の中学・高校生と19歳から29歳の大学生や社会人の子どもを持つ世帯と同じく、同居している子どもがいない世帯において、ペットの存在感に対する評価が高い、という結果からも、ペットの「子ども」としての存在性が推測されよう。

以上のように、ペットの「子ども」としての存在性を解明していくにあたって、同居している最年少の子どもの年齢という要因が重要な意味を持つことが判明した。今回の調査では、女性のペット飼育者のケース数が十分でないために、同居世帯人数と同居している最年少の子どもの年齢という2つの要因がペットの存在感に及ぼす影響を検証することはできなかった。しかし、子どもの有無がペットの存在感に及ぼす影響を調査するうえで、同居している最年少の子どもの年齢という要因は十分に考慮すべきであり、次回の調査にこの課題を託したい。

5. おわりに

本調査では、ペットの「子ども」としての存在性という観点から、JGSS-2000のペットの存在感に関する設問項目で得られたデータを基に、ペット飼育者の同居世帯人数、同居している子どもの有無、そして同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響について分析してきた。その結果、同居世帯人数が多くなるほどペットの飼育率は高くなるが、ペットの存在感に対する評価は低くなること、反対に、同居世帯人数が少なくなるほど、ペットの飼育率は低くなるが、ペットの存在感に対する評価は高くなることが判明した。また、同居世帯人数によって、同居している子どもの有無よりも、同居世帯人数という要因がペットの存在感に影響する場合と、同居世帯人数よりも、同居している子どもの有無という要因が影響する場合があることが示唆された。最後に、子どもの有無がペットの存在感に及ぼす影響を検証するうえで、同居している最年少の子どもの年齢が重要な要因であることが明らかになった。今回の調査では、サンプル数が十分でないために、同居世帯人数との関係から、同居している最年少の子どもの年齢がペットの存在感に及ぼす影響を調べることができなかった。また、同様の理由で、ペット飼育者の年齢や婚姻の有無がペットの存在感に及ぼす影響についても分析することが不可能であった。「子ども」としてのペットの存在性をさらに究明するためにも、同居世帯人数と共に、ペット飼育者の属性に関するこれらの要因がペットの存在感に及ぼす影響について検証していくことを、今後の課題としたい。

[参考文献]

- 味の素ゼネラルフーズ, 1996, 「～平成・平均ペット像～ ペットは子供! わが家の一員」
- Albert, A. and Bulcroft, K., 1988, "Pets, Families, and the Life Course," *Journal of Marriage and the Family*, 50, 543-552.
- Beck, A. and Katcher, A., 1996, *Between Pets and People*, Purdue University Press.
- Robinson, I., 1995, *The Waltham Book of Human-Animal Interaction: Benefits and Responsibilities of Pet Ownership*, Pergamon.
- 総理府広報室(編), 2000, 「動物愛護 月刊世論調査」, 32, 79-141.